筑紫女学園大学リポジト

A Categorical Approach to Copular Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/979

コピュラ文とカテゴリー

緒　方　隆　文

A Categorical Approach to Copular Constructions

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学研究紀要　第14号別刷
2019年１月
福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*
No. 14, pp. 39－51, January 2019
Ishizaka, Dazaifu-shi,
Fukuoka-ken, Japan

コピュラ文とカテゴリー

緒　方　隆　文

A Categorical Approach to Copular Constructions

Takafumi OGATA

1．はじめに

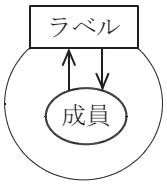
本稿は日本語のコピュラ文を考察し、その意味と生成を明らかにすることを目的とする。このとき意味をカテゴリースキーマで表記する。カテゴリースキーマとは、カテゴリーと成員の関係をもとに意味を表すものになる。カテゴリースキーマで意味を表すことで、それぞれのコピュラ文において、何が同じで何が違うのかが明確になると考える。このときコピュラ文は〈包含〉と〈連結〉の２つの操作によって生成されるとする。〈包含〉とは、同一カテゴリー内でのカテゴリーと成員の関係をいう。一方〈連結〉とは、異なるカテゴリー間で、成員間またはカテゴリー（ラベル）間で関連づけることを指す。この〈包含〉と〈連結〉は対立するものではなく、〈包含〉と〈連結〉が併存することもあれば、〈包含〉のみ、〈連結〉のみの場合もある。この２つの操作をもとに、カテゴリースキーマ上でコピュラ文の意味を示していく。

コピュラ文は、繋辞によって２つを結びつける表現である。結びつけるものは、名詞句とは限らず、様々な意味を表す。そのため従来のコピュラ文研究では、その中心に分類の研究があった。しかし分類にあたり、異なるタイプのコピュラ文を誤解して議論されることも多々あった。それは２つの操作〈包含〉と〈連結〉が併合して用いられる時、タイプが異なっても似た含意を持つからと考えられる。そのため本稿は、分類を主眼とせず、コピュラ文の意味の生成過程に焦点をあてる。もっと言えば、〈包含〉と〈連結〉の２つが、どのようにコピュラ文の生成に関わっているかをカテゴリースキーマを通して論じていく。そして〈包含〉と〈連結〉には、方向性があり、それにより語順が定まることも見ていく。また（倒置）指定文で論じられてきた変項についても、より広い使い方をする。指標を用いながら、語用論レベルで意味が決定されるプロセスも考察する。カテゴリースキーマ上に現れる要素はすべて表現されるとは限らず、その一部に焦点があたり表現されることをも示していく。

以下の構成は２節で〈包含〉と〈連結〉を、３節で変項と語用論レベルの意味のためのフレームを、４節でコピュラ文を具体的に分析し、５節で「今の」「昔の」とよく似てはいるが全く異なる構文を見ていくこととする。

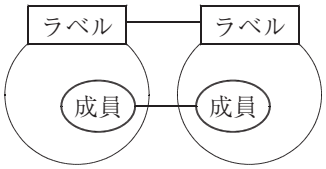
2．〈包含〉と〈連結〉

(1)



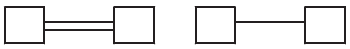
２つを結びつけるコピュラ表現には、その生成にあたり、２つの道具〈包含〉と〈連結〉があると考える。〈包含〉は、カテゴリーと成員の関係になる。典型的には個体とその属性がそれにあたる。基本スキーマは(1)になる。カテゴリーラベルと成員の２つが関係を持つ。このとき方向が２つあり、ラベルから成員に向かう場合と、成員からラベルへ向かう場合がある。この方向は、カテゴリーと成員の中身で決まる(4.1節で後述)。そして方向に従い、語順が決まる。

(2)



次に〈連結〉は、異なる２つのカテゴリー間における関係づけ(連結)になる。基本スキーマは(2)になる。カテゴリーラベル間で連結がおこる場合と、成員間で連結がおこる場合があり、その両方で連結が起こる場合もある。ただしカテゴリーラベルと成員を連結するものはない。連結には方向性があり、左側のカテゴリーから右側のカテゴリーへと連結する。そのため〈連結〉では、左側の要素が先に現れるので、語順が決まる。

(3)　a．強連結　　b．弱連結



このとき関係づけ(連結)の度合いは、(3)に示すように２種類、強連結と弱連結がある。強連結は二重線で結ばれ、両者が同じとみなされる(3a)。一方弱連結は一重線で結ばれ、互いが単に関連することを示す(3b)。また〈包括〉での結合の度合いは３種類あり、強い順に、二重線、一重線、破線で表記する。

〈包括〉の例を(4a)に、〈連結〉の例を(4b)に示す。(4a)では[かしこい]は、カテゴリー[太郎]の属性成員になる。カテゴリースキーマ上で、[太郎]に[かしこい]は含まれる。そのため〈包含〉関係が成り立つ。一方(4b)では、ジキル博士とハイド氏が関連しておりそれが結びついている(この場合、ラベル間の強連結)。

(4)　a．太郎はかしこい。　　b．ジキル博士はハイド氏だ。

この〈包含〉と〈連結〉は対立するものではなく、併存する場合も少なくない。つまり〈包含〉と〈連結〉に関しては、３種類存在する。〈包含〉のみ、〈包含〉と〈連結〉が併存、〈連結〉のみの３つである。具体的には〈包含〉のみでは措定文と「象は鼻が長い」構文、〈連結〉のみでは(倒置)同一性文と(倒置)指定文、〈包含〉と〈連結〉の併存はそれ以外で見られる(スキーマは後述)。

この２つの道具を用い、コピュラ文の意味を表していく。ここで確認であるが、本稿の目的はコピュラ文の分類ではない。カテゴリースキーマにおいて〈包含〉〈連結〉関係により、コピュラ文の意味を明らかにすることにある。しかし従来の分類から全くはずれて議論することはできない。そのためまず西山(2003)等で用いられた分類をもとに、各々のコピュラ文の意味表記をカテゴリースキーマで表記していく。そしてその後でいくつか構文を考察する(４節)。ただすべてのコピュラ文が、従来の分類のいずれかに割り当てられるとは考えない。つまり本稿では、分類の数を限定しない。コピュラ文がいくつに分類されるかは、本稿では考察対象とならない。本当に重要なのは分類ではなく、その仕組みにあると考えるからである。仕組みを考えることが、コピュラ文が持つ機能により近づく手立てと考える。

3．フレームと変項

コピュラ文の意味は、意味論レベルだけで確定することもあれば、語用論レベルで初めて確定することもある。語用論レベルで意味が決まるのは、背景となる状況設定によって意味が変わるからである。状況設定が意味に関わる場合、何らかの形で表記しなければ、意味が確定されないことになる。例えばウナギ文で「ぼくはウナギだ」と言ったとしても、注文の場合であれば注文品、劇の役柄であれば役名、嫌いな食べ物の場合であれば嫌いな食材など、背景となる状況によって意味はどれだけでも変わる。つまり語用論レベルが確定しなければ、意味が決まらない場合がある。

本稿ではこれをフレーム(□枠で表記)で示していく。通例のスキーマの外側に、フレームを設定する。このフレームは単に状況を設定するだけでなく、時には指標をつけることで、意味論レベルの項に影響を及ぼす(4.6節のウナギ文など)。むろんフレームなしで意味が確定する場合(意味論レベルで確定)、フレームはカテゴリースキーマに表記されることはない。

さらに変項について述べたい。変項は従来であれば、(倒置)指定文において用いられてきた概念である。しかし本稿では2つの変項を設定する。一つは意味論レベルの変項で、従来のものになる。ただしこの変項は、(倒置)指定文以外のコピュラ文にも応用していく。この変項を x, y, z,... で表記する。もう一つは語用論レベルの変項で、フレームラベルと連動する。これを R で表記していく。具体的にはウナギ文で用いられる。さらに変項に加え、不定の項を追加する。これは同定文で用いられる(4.4節で後述)。変項と違って、それは何かというと、何々だと指定するという含意はない。単にカテゴリーの成員を示しているにすぎず、同定するものと結びつける働きをする。表記は α, β, γ,... で示していく。以下4節で、具体的にコピュラ文を分析する。

4．コピュラ文

コピュラ文は数多く研究され、いくつか分類が提案されている。Higgins(1979)、Declerck(1988)、上林(1988)、熊本(1995, 2016他)、西山(2003, 2013他)等、英語、日本語での研究も数多くある。しかし定義に用いる道具立てが異なったり、定義そのものが不明瞭で分類に問題が生じているものもある。また援用する研究者に誤解があり、誤解のまま分類を用いた研究がなされることもあった。

本稿は、定義による正確な分類を目指すのではなく、カテゴリースキーマによる意味表記に主眼を置く。そのためコピュラ文が、いくつに分類されるかは考察しない。とはいえ従来の分類によるコピュラ文が、どのようなカテゴリースキーマを持つかを示すことは意味がある。そのためまず西山(1993, 2003, 2013)、熊本(1995, 2016)の下記分類が、どのようなカテゴリースキーマを持つのかを示していく[*1]。(倒置)同定文の分類は、熊本(1995)を用いる。熊本(1995)は西山(1990, 1993)とは異なり、(倒置)同定文をさらに2つに細分する提案をしている。ここで扱う分類を(5)に示す(熊本(2016: 2)からの引用)。

(5) 措定文: Aの指示対象について、属性Bを帰す。Aは、指示的名詞句、Bは、叙述名詞句。
(西山 2013)

(倒置)指定文: Aが表す命題関数［...x...］における変項xを満たす値Bを指定する。Aは変項名詞句、Bは値名詞句。 (西山 2013)

（倒置）同定文：（i）　AはBという特徴記述を満たす「もの」であると述べることによって、Aの指示対象を他から識別して認定する。Aは指示的名詞句、Bは特徴記述を満たすものを指示する名詞句。

（ii）　Aの指示対象を、同定に必要な情報を求めている人の経験した個体Bの指示対象と結びつけることにより、他から識別して認定する。A、B共に指示的名詞句。（熊本 1995）

（倒置）同一性文：Aの指示対象を念頭におき、それはBの指示対象と同一であると認定する。A、B共に指示的名詞句。（西山 2003）

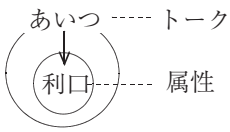
以下の節でまず、(5)に分類されたコピュラ文をカテゴリースキーマで分析していく。その後で、定義文、ウナギ文、「象は鼻が長い」構文、カキ料理構文を考察する。後の4構文では、必ずしも(5)にあげた分類のスキーマパターンと合致しない。これはカテゴリースキーマの観点からは、(5)の分類に属さないものがたくさんあることを意味している。本稿が考えるコピュラ文は、〈包含〉と〈連結〉の二つの道具で分析できることが主眼になる。2つの名詞句の関係を明らかにするとともに、何が表現され何が表現されていないのか、どういう語順で現れるのかを示すことが目的となる。以下、構文ごとにスキーマ分析を行っていく。

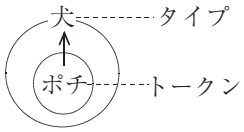
4.1　措定文

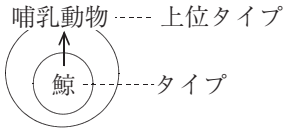
まず措定文は、Aの属性をBが叙述する表現になる。この叙述は、〈包含〉関係によってなされる。〈包含〉関係は、カテゴリー（ラベル）と成員の関係になる。このときカテゴリー→成員と、成員→カテゴリーの2つの方向がある。どちらの方向をとるかにより、語順が決まる。

方向は、ラベルと成員が何であるかによって決まる。(6)の例文をもとに、成員とカテゴリーの関係をスキーマで示したものが(7)になる。個体レベルのトークンが基準となり、トークンで方向が変わる。(6a)では、トークンがどのような属性を持つかを叙述している。(7a)に示すように、トークン→属性の語順になる。(6b)では、トークンがどのようなタイプに所属するかを叙述している。(7b)に示すように、トークン→タイプの語順となる。(6c)では、タイプがどんな上位タイプに所属するかを叙述している。(7c)に示すように、タイプ→上位タイプになる。

(6)　a．あいつは利口だ。　　b．ポチは犬だ。　　c．鯨は哺乳動物だ。

(7)　a． 

b． 

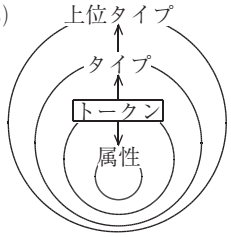
c． 

これをまとめて表記したものが(8)になる。トークンを中心に、方向が逆転することを示している。ただ注意しなければならないのは、ここで考えるカテゴリーは広い概念で、ただ単に関係するものを成員とするような緩やかなものも、カテゴリーと考える。そのためタイプや上位タイプは、必ずしも種類を表すものとは限らない。

しかし方向は(8)に限定されない。実際には(9)に示すように両方向がある。破線矢印の方向はすべて、実践矢印と逆向きになっている。とはいえランダムに方向が選ばれるのではなく、破線矢印の

方向になるのは決まっている。もともと(9)の破線矢印は、「NP 1 の NP 2 」において見られる方向である[*2]。破線矢印の方向で、NP 1 、NP 2 が選ばれ、そのまま語順となる。一方コピュラ文の場合、本来の向きと反対の方向(破線矢印の方向)になるのは、成員が際立ちの特徴を持ったもの、いわば典型成員のときになる。具体例として(10)のような例がある。

(8)



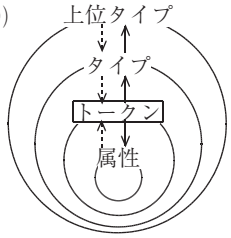
(10) a.(属性→トークン)　スポーツのプロは、イチロー選手です。

(cf. イチロー選手は、スポーツのプロです。)

b.(上位タイプ→タイプ)　焼酎は、黒霧島です。

(cf. 黒霧島は、焼酎です。)

(9)



なお「NP 1 の NP 2 」で所有の意味を表す場合、破線矢印と反対の方向になる。これは所有者→所有物となり、所有者の方が際立ちが高いからである。つまり際立ち(卓越性)により順序が決まる。

実線矢印と破線矢印の両方向がでるのは、何を参照点とするかの違いと言える。コピュラ文は「卓越性(情報重要性)の低いモノから高いモノへの方向(語順)」を持つ。一方「NP 1 の NP 2 」の場合「卓越性(情報重要性)の高いモノから低いモノへの方向(語順)」になる。トークンと属性の場合、通常であればどのような属性を持つかが卓越性(情報重要性)が高い。そのためコピュラ文ではトークン→属性となる。逆にトークンとタイプでは、トークンを叙述するための情報としてのタイプの方が卓越性(情報重要性)が高い。そのためトークン→タイプとなる。これはタイプと上位タイプの場合も同様になる。

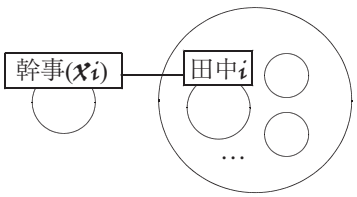
なお倒置措定文が存在しない理由は、スキーマから明確である。というのも成員とラベルの関係づけには方向性があり、それにしたがってコピュラ文が作られる。そのため逆方向の倒置措定文は、この方向性に矛盾するために、不適格となる。

4.2　指定文／倒置指定文

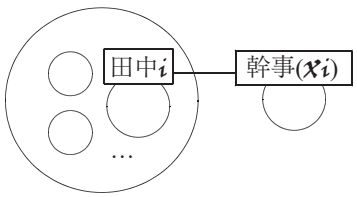
次に(倒置)指定文を考察する。(倒置)指定文には、変項がある。それは何かというと何々だという形で指定する文になる。これは〈連結〉により生成される。しかしただ単に〈連結〉するのではなく、グループの中のどれかという、カテゴリーの中からの選択という含意がある。(11a, b)に対応するスキーマを(12)に示す。

(11) a. 幹事は田中だ。[倒置指定文]　　b. 田中が幹事だ。[指定文]

(12) a.



b.



（倒置）指定文のスキーマ⑿では、変項を（Xi）で表記している。（12a）で言えば、幹事は誰か（Xi）というと、それはカテゴリー内の田中iとなる。この「カテゴリー内の」田中iの部分が大切で、カテゴリー内から一つを選び出す作業が、（倒置）同一性文との決定的な違いになる。田中の上位カテゴリーにラベルがないが、通例意識されずに選択されるからである*3。（12b）の指定文のスキーマにおいても、左右対称になっているだけで、同じことが言える。ただ左右の違いが、語順の違いとなっている。〈連結〉の場合、左側に現れるものが語順において先に具現化される。

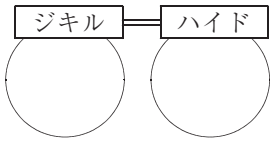
ここで変項について付記したい。従来変項は、（倒置）指定文のみにあるとされてきた。確かに⑸に分類されたコピュラ文、措定文、（倒置）指定文、（倒置）同一性文、（倒置）同定文においては、変項名詞が現れるのは、（倒置）指定文に限られる。しかし本稿では、言語化されないものにも変項が存在し、意味の決定に寄与すると考える。そのため⑸の分類に入らないコピュラ構文においては変項が生じうる。３節で述べたように、本稿では２種類の変項を設定する。それらが定義文、ウナギ文、「象は鼻が長い」構文、カキ料理構文において変項を持つことを、カテゴリースキーマで表記していく。このとき変項の解には、同一の指標を付与することとする。一つのスキーマに現れる変項は、一つとは限らず、複数の変更が現れることもある。

4.3　同一性文／倒置同一性文

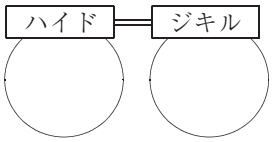
（倒置）同一性文ではＡとＢが同一であることを示す。同一であることを二重線の〈連結〉で示す。（倒置）同一性文の例（13a, b）のスキーマを（14a, b）に各々に示す。

⒀　ａ．ジキル博士はハイド氏だ。［倒置同一性文］　　ｂ．ハイド氏はジキル博士だ。［同一性文］

⒁　ａ．



ｂ．



同一であるために、ＡとＢは同列のもの、同種のモノである必要がある。⒁では人物という同列のものが強連結によって結びつけられている。倒置同一性文と同一性文は左右対称となっており、左側から言語化されるため、語順が異なるものになっている。なお結びつけるものはトークンとトークンを結びつけるのを基本とする。

（倒置）同一性文は、（倒置）指定文と次の３点で大きく異なる。一つは、〈連結〉が２つのラベル間の強連結になる。単に関連付いているというより、同一物と見なされている。二つめは、変項がないことである。（倒置）同一性文では、２つを同一物として単純に連結する。そのためＡが何かというとＢであるという含意はない。三つめは２つめと連動している。変項がないため、カテゴリーの中から選び出す必要がなくなり、Ｂを含むカテゴリーは意識されず、スキーマ上に現れない。

4.4　同定文／倒置同定文

同定文をどのように考えるかで、同定文に含まれるものが異なってくる。西山（1993, 2003）は、述語名詞句を特徴記述だけに限定する。しかし本稿では熊本（1995）を援用し、特徴記述に加え、指

示対象の特徴を記述するものも含め、２種類あると考える。というのもカテゴリースキーマに共通性があるからである。まず熊本(1995: 158)が述べる(倒置)同定文を⒂にあげる。(15i)の例が⒃、(15ii)の例が⒄になる。

⒂ (i) ”knowledge by description”による同定:「A」は「B」の特徴記述をみたす「もの」であると述べることによって、「A」の指示対象を他から識別して認定する。

(ii) ”knowledge by acquaintance”による同定:「A」の指示対象を、同定に必要な情報を求めている人の経験した個体「B」の指示対象と結びつけることにより、他から識別して認定する。

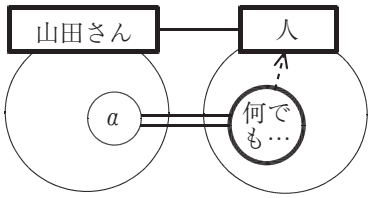
⒃ a. 山田さんは、何でも反対する人だ。b. 何でも反対する人が山田さんだ。(西山 2003: 167)

⒄ a. 山田さんは昨日のパーティで洋子の横に座った人だよ。

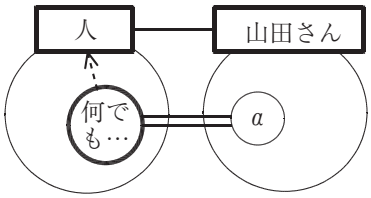
b. 昨日のパーティで洋子の横に座った人が山田さんだよ。 (熊本 1995: 155)

西山(1993)では(15ii)は(倒置)同一性文に分類される。しかし本稿は⒂の２分類を支持する。なぜならカテゴリースキーマでは、１点を除いて共通した構造を持つからである。同定文(15i)のスキーマが⒅、同定文(15ii)のスキーマが⒆になる。

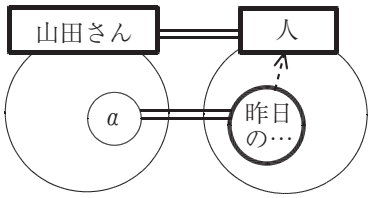
⒅ a. 倒置同定文 (15i)



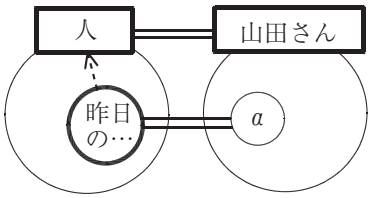
b. 同定文 (15i)



⒆ a. 倒置同定文 (15ii)



b. 同定文 (15ii)



⒅⒆はどちらも、ラベル間と成員間の両方における同時の〈連結〉になる。つまり(倒置)同定文とは、２つのカテゴリーで、ラベル間と成員間の両方で〈連結〉される文と考える。成員間で属性が同じである(二重線で表記)ことを前提とし、カテゴリー間で関連付けが行われる文なのである。属性の同一にあたり、α が用いられているが、これは変項ではない。変項であれば、それは何かというと何々となり、(倒置)指定文になる。そうではなく、属性があるんだけれどもそれはこれと同一ですと確認(同定)するためのものである。本来であれば、同定する内容は「A」の属性として存在するものである。それを別カテゴリー内に置き同定しているにすぎない。属性として α と書かずに空欄でもいいのだが、分かりやすさのために α と記しているにすぎない。これを同定項と呼ぶ。

個別に見ていけば、⒃は〈山田さん〉と〈何でも反対する人〉が同一人物であることを述べているのではない。〈何でも反対する人〉は指示対象を持たない。単にそうした属性を持った人と特徴付けを

しているにすぎない。その特徴付けられた人と〈山田さん〉が関連を持つことを述べている(一重線で表記)。ただし属性部分同士は、強連結で結ばれており、同じ属性を持つことを示している。つまり二つのものは、同じ属性を持つことで、関連性が生じ同定される。いわば属性の共有化による同定と言える、⒂では太線になっているところが言語化される箇所になる。

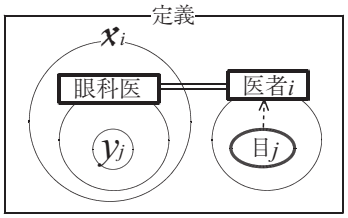
一方⒄の場合、ＡとＢは同一人物であることを述べている。つまり指示対象が同じものを指している(⒆では二重線で表記)。同じ属性を持つことで、２つの指示対象が同定されている。このときの⒆の属性 α は永続的／本質的属性でないことが多い。よって(15i)と(15ii)の違いは、単に連結度の違いに過ぎず、基本同じものと見なすことができる。しかし実際の指示対象を持つかどうかで異なるため、熊本(1995)と同様２分類を支持する。

4.5　定義文

⒇にあるような定義文は、同一性文と同様、ラベル間での強連結によって生成される。しかしその構造は大きく異なる。⒇のスキーマが、㉑になる。

⒇　眼科医とは目の医者のことである。

㉑



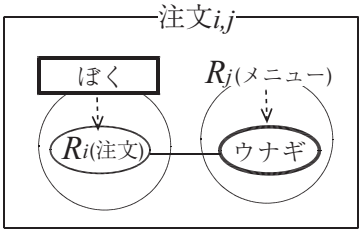
㉑では、定義がなされるときには、まず定義フレームが立ち上がることを示している。定義フレームが立ち上がると、定義対象(眼科医)に２つの変項が現れる。一つはそれが属するカテゴリーが何かという変項(x_i)で、もう一つはそれを特徴付ける属性成員が何かという変項(y_j)になる*4。つまるところ定義とは、この２つの変項の特定と考える。それが何の一種であって、どのような特徴を持つかが定義だからである。変項の値を定義部分に挿入し、カテゴリーラベル間で〈連結〉する表現が定義文と見なす。この連結は、両者が同じであることを述べるものなので、強連結(二重線で表記)となる。また定義文が措定文の意味合いを持つのは、２つの変項(x, y)と定義対象(眼科医)が包含関係にあるからと考える。しかしスキーマで示すように、〈連結〉による生成を基本とするのが定義文と考える。

4.6　ウナギ文

ウナギ文は㉒のような文で、語用論的に意味が定まる。この構文に対しては、様々な研究がなされてきたが、西山(2003)では措定文として分類している。しかし本稿では、措定文のスキーマではなく、㉓のようなスキーマを持つと考える。㉓では太線になっているところが言語化される。

㉒　ぼくはウナギだ。

㉓



まず語用論レベルでの前提部分を、フレームで表す。ここでは仮に[注文]とする。そしてフレーム(注文)の中で、意味論レベルのスキーマが生成される。ウナギ文の場合、意味論レベルで２カ所に変項(R_i, R_j)がある。これはフレームラベルと連動する変項になる。㉓ではカテゴリー〈ぼく〉に、変項(R_i)の成員が生じ、フレームラベルがそのまま値として入

る。それと同時に[ウナギ]のカテゴリー(R_j)が定まることとなる。変項(R_j)はウナギと関連したものがラベルとして入る。そしてカテゴリー R_j(メニュー)の成員が〈ウナギ〉になる。そして〈ウナギ〉と R_i(注文)が連結される。このように意味は何のフレームかが定まって初めて、語用論レベルで意味が確定する。㉓に示すようにウナギ文では要素すべてが活性化されない。「ぼく」と「ウナギ」だけが活性化され、「ぼくはウナギだ」の文が生成される。しかしスキーマ㉓をもとにし、他の要素も活性化した表現は可能である。

㉔　a．ぼくの注文は、メニューの中のウナギだ。(スキーマ全体が活性化された表現)

　　b．ぼくの注文は、ウナギだ。([メニュー]だけ活性化されない)

　　c．注文は、ウナギだ。(成員間の連結のみ活性化される)

(24a)はメニューから注文するのが当たり前なので不自然に感じるかもしれない。しかし「ぼくの注文は、裏メニューのオムレツだ」のように、裏メニューなど情報量が高いものがくれば、何ら不自然さはなくなる。また(24c)も注文の状況で、注文はというのは不自然かもしれないが、「ご注文は、ウナギですか」のように、店員の質問というかたちをとればより自然に感じると思われる。つまり(22a)のウナギ文と㉔の文はスキーマを共有しており、何が活性化されるかにより、違う表現になっているに過ぎない。

なおウナギ文には、倒置ウナギ文は存在しない。㉕は、㉒を倒置したものであるが、かなり特殊な状況でない限り、不適格な文になる。

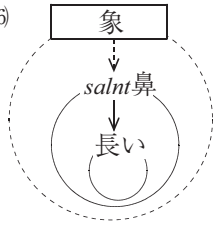
㉕　*ウナギが、ぼくだ。

なぜ倒置表現が不適格になるかというと、対称性がないからと考えられる。これまで倒置が可能だったものはすべて、同等レベルのものである。カテゴリーレベルであれ、成員レベルであれ、同等のものがそれぞれが活性化され表現されている。しかしウナギ文においては、活性化されているものがカテゴリーレベルと成員レベルで異なっている。この非対称性のために、倒置できなくなると考えられる*5。

4.7 「象は鼻が長い」構文

「象は鼻が長い」構文には、西山(2003)に従えば、[長鼻－読み]と[指定内蔵読み]の二つがある。まず[長鼻－読み]とは、「「ＢがＣ(だ)」の部分がひとまとまりの属性」を表しており、[中立叙述]を表すものになる。「象は鼻が長い」を例にとれば、「鼻が長い」が象の特徴的な属性になっている。このとき[長鼻－読み]のスキーマは㉖になる。

㉖



㉖では象にとって「鼻が長い」は、他と区別される弁別的特徴であり対比の意味合いを持つ。これは取りも直さず、象と言えば鼻が特徴付けとして働くことになる。それをスキーマ㉖では、〈象〉に関連するものという緩いカテゴリー内で、卓越した成員〈鼻〉が選ばれ、その特徴が述べられていると表記する(緩いカテゴリーを破線、卓立を *salnt* で表記)。このとき〈鼻〉と〈長い〉の関係は、それほど強いものではなく、単に「鼻」を叙述するにすぎない。そのため〈鼻〉は一重線のカテゴリーとなる。語順となる方向は、まず卓越成員なので象(タイプ)→鼻(タイプ)(破線矢印)、次に属性成

員なので鼻→長いとなる（通常方向：実線矢印）。

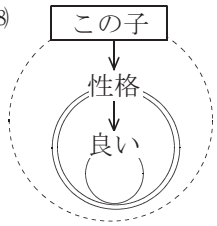
ただ卓立性には幅があり、ほぼ感じられないものもある。そのため［長鼻－読み］の典型例は㉖としても、卓越性が弱いものもある。例として㉗がある。（27a）のスキーマを㉘に示す。

㉗　a．この子は、性格が良い。　b．太郎は、頭が良い。　（西山 2003：192-193）

㉗には、強い卓立性・典型性を感じることができない。卓立性がある「性格」が選ばれ、それを叙述するのではなく、一つの属性／特性が選ばれたにすぎない。そのため㉘では、〈この子〉に関係する「性格が良い」がゲシュタルト化し、属性扱いとなっている（二重線で表記）。そのためこの子→（性格→良い）の語順となる（トークン→属性）。

㉘の延長線上に、［指定内蔵読み］が存在する。［指定内蔵読み］の例の（29b）のスキーマは㉚になる。

㉘

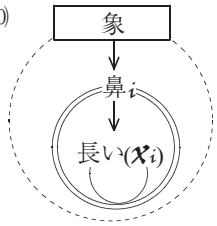


㉙　a．子供：お母さん、象の長いところはどこ、首なの。

b．母：いいえ、象は鼻が長いのよ。　（西山 2003：196）

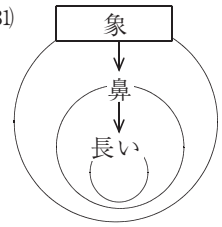
西山（2003）では（29b）のような例を「述語に指定文を内蔵した措定文」であり、「ＡはＢがＣ（だ）」のＢが、「ｘがＣ（だ）」のｘの値になっているとする。また「ＢがＣ（だ）」全体が、Ａの属性となっていると論じている。本稿では㉚は、スキーマ㉘と構造はほぼ同じである。一点違うのは変項が入っている。〈長い〉に変項があり、象に関して長いのは何かというと、〈鼻〉であると述べている。鼻は二重線で示してあるのでゲシュタルト化しており、象の属性としての働きをしている。

㉚



ここで「象の鼻は長い」を考察する。この表現は、多くの研究で「象は鼻が長い」と関連づけられて述べられてきた。とりわけ主題化操作によって関係づけられてきた。しかし西山（2003）と同様、本稿では両者を関連づけず、派生させることはしない。ただ関連があるように感じるのは、スキーマが似ているからである。実質同じ構造をしている。㉛がそのスキーマになる。「象の鼻」では象と鼻は、全体と部分の関係になっている。そのためカテゴリーと成員の結びつきが、㉖より強い（一重線で表記）。そしてその〈鼻〉の属性が〈長い〉によって表される。むろん〈鼻〉と〈長い〉はゲシュタルト化していないので、一重線で表記される。語順においては、「象の鼻」は「NP１のNP２」なので［象→鼻］の語順、〈長い〉は〈鼻〉の属性成員なので［鼻→長い］の語順になる。

㉛



4.8　カキ料理構文

カキ料理構文は、㉜のような構文で、西山（2003：261）では「カキ料理構文「Ｘは、ＹがＺだ」は、対応する指定文「Ｙが、ＸのＺだ」の基本的意味を保持しながらも、全体としては「Ｘについて属性を帰している」という意味で措定文である」としている。

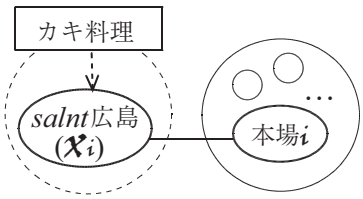
㉜　a．カキ料理は、広島が本場だ。　c．鈴木は、囲碁が趣味だ。

b．この病院は、田中が院長だ。　d．金沢の町は、本屋さんの多いのが特徴だ。

e．A社は山田さんが社長だ。　　（西山 2003：260-261）

つまり指定文の要素を持ちながら措定文であると述べている。本稿ではカキ料理構文は(33)のスキーマを持つと考える。

(33)



(33)では、指定文と措定文の要素が両方入っている。まずカキ料理に関連するものとしてカテゴリーが存在する（破線で表記）。そのカテゴリーで卓立した成員〈広島〉が選ばれる。カキ料理といえば、広島が想起されるという意味合いがある。卓立した成員なので、ラベル→成員の方向（語順）になる（破線矢印）[*6]。この〈広島〉は変項（x_i）を持っている。広島は何かというと〈本場$_i$〉であるとなる。〈広島（x_i）〉と〈本場$_i$〉が連結されることで、「広島が本場である」となる。破線矢印の〈包含〉部分が措定文、一重線による〈連結〉部分が指定文の要素を持つ。

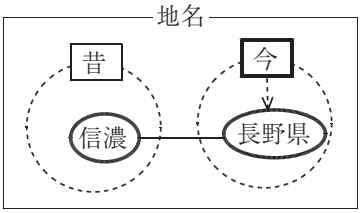
5．「昔の」「今の」

コピュラ文をカテゴリースキーマでその意味を表記することで、(34)のような、一見矛盾したような構文の意味を説明できる。(34)は北野（2018）からの引用である。(34)は構文は似ているが、全く異なるスキーマを持つことを示していく。

(34)　a．信濃は今の長野県です。　b．信濃は昔の長野県です。（北野 2018：57）

まず（34a）から考える。これは単純な〈連結〉によって生み出されている。スキーマは(35)になる。地名というフレームの中で、昔に関係するカテゴリー〈昔〉と、今に関係するカテゴリー〈今〉が緩やかなカテゴリーとして存在する（破線で表記）。そしてカテゴリー〈昔〉の成員〈信濃〉と、カテゴリー〈今〉の成員〈長野県〉が連結されている。このときカテゴリーラベル〈今〉が活性化される。「NP 1 の NP 2」では、タイプ→トークンになることから「今の長野県」と表記される。そして〈連結〉され左から、「信濃は今の長野県です」となる。

(35)



この(35)のスキーマを元に、それ以外にも表現が生じる[*7]。

(36)　a．昔の信濃は、今の長野県です。（スキーマ全体が活性化された表現）

b．昔の信濃は、長野県です。（[今]だけ活性化されない）

c．信濃は、長野県です。（成員間の連結のみ活性化される）

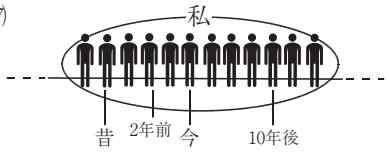
ウナギ文の時と同様、（34a）（36）の表現は、一つのカテゴリースキーマから生成される。活性化されるものの違いにより、異なる表現になっているにすぎない。すべてが成員間の〈連結〉を基本とする(35)のスキーマから生成されている。

では（34b）はどうであろうか。「信濃」と「昔の長野県」の部分が〈連結〉している。これはスキーマ(35)では無理である。というのも〈昔〉と〈長野県〉を自然な形で結びつけることができない。そのため（34b）は、（35）とは異なるスキーマを持つことが分かる。

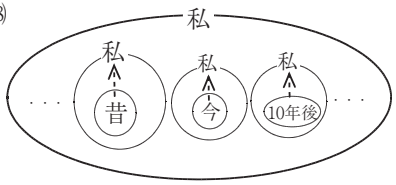
そこでまず「昔の長野県」から考察する。これは西山（2003：31）が述べる「NP 1 の NP 2」のタ

イプC（時間領域NP１における、NP２の指示対象の断片の固定）に相当する。「昔の長野県」のカテゴリースキーマを考えるにあたり、まず「昔／２年前／今／10年後の私」で考えたい。この表現は(37)のようなカテゴリーをなすと考える。「私」は一人しかいないのだが時間毎に分身が存在すると認識している。つまりその時その時の［私］という成員からなる集合体、それが〈私〉というカテゴリーと見なしている[*8]。そのため「昔の私」であれば一成員として、［昔］という属性を持った〈私〉が存在する。それをスキーマで示したものが(38)になる。「NP１のNP２」では属性成員→カテゴリーラベルの方向（語順）となるので、「昔の私」と表現される。同様にそれぞれの時間の属性を持った私が、カテゴリー〈私〉の成員として存在する。

(37)

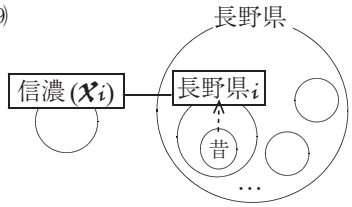


(38)



これを踏まえ、(34b)のスキーマを示したものが(39)になる。(39)は倒置指定文のスキーマと基本同じである。つまり(34b)は、倒置指定文の一種と考える。信濃はどの長野県かというと、昔の長野県だと言っている。(34)に限らず、こうした違いを説明できるのが、カテゴリー分析であり、カテゴリースキーマと考える。指定名詞句などとは別の仕組み、カテゴリースキーマによる分析が必要であると考える。

(39)



6．まとめ

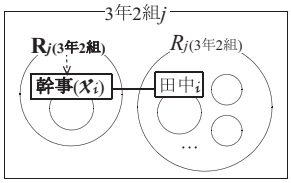
本稿は、コピュラ文の意味及び生成プロセスを考察した。コピュラ文では、〈包含〉と〈連結〉の２つの操作でコピュラ文が生成されることを見た。そしてコピュラ文の意味を、カテゴリースキーマで表した。従来の研究では、どのように分類するかに焦点が置かれ、分類されたコピュラ文がどのような特性を持つかが論じられてきた。しかし本稿は分類に対して、いくつあるか、どのような種類があるかに焦点を当てていない。コピュラ文は、もっと多様な意味を持つと考えている。西山(2003)、熊本(1995)等の分類をもとに、従来の分類されたコピュラ文をカテゴリースキーマで表現したが、それに当てはまらないスキーマを持つコピュラ文もいくつか示した。ここでは主に２つの名詞句を結びつけるコピュラ文を見てきたが、名詞句以外を用いるコピュラ文においても、同様のことが当てはまると考える。また「NP１のNP２」とコピュラ文の関係も、今後の課題としたい。

注

＊1　西山(2003)では日本語のコピュラ文「ＡはＢ（だ）」を意味構造上、(5)に定義文を加え５つのタイプに分類する。まず主要な４つを述べ、その後で定義文のスキーマについても論じて行く。

＊2　コピュラ文と「NP１のNP２」は、似た意味を持ち、言い換えができることも多い。しかしながら両者は、重ならない部分も多い。例えば「の」が持つ所有の意味は、コピュラ文にはない。関連を持たせながら分析をすることは重要であるが、あくまで異なるものとしての分析が必要となる。

＊3　むろんクラス毎に幹事がいる場合、例えば「３年２組の幹事は、田中だ」においては、カテゴリーラベルは３年２組になる。この場合、［３年２組］というフレームが立ち上がり、⑿のスキーマに変項 R が生じる。このプロセスについては、4.6節のウナギ文のところで論じる。

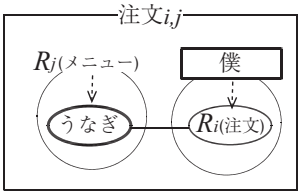


＊4　属性成員は必ずしも名詞句で表現されるわけではない。

＊5　⒁の倒置文の適否は、やや揺れる。スキーマは(ii)になる。同等レベルのものが活性化されている場合、容認性が上がるようにも思えるが(ia, b)、成員のみが活性化された(ic)は不適格となる。これはおそらく、卓越性の問題のように思えるが、さらなる考察が必要である。

(i)　a．?メニューにあるウナギが、ぼくの注文だ。
　　（スキーマ全体が活性化）
　　b．ウナギが、ぼくの注文だ。（［メニュー］だけ活性化されない）
　　c．*ウナギが、注文だ。（成員間の連結のみ活性化される）

(ii)



＊6　このとき、〈連結〉は必ずしも付け加えなくてもよい場合もある。〈包含〉の部分のみで表現したものに(i)がある。

(i)　a．カキ料理は広島だ。　b．カキ料理は牡蠣屋だ。（広島の有名店）

＊7　ここでもスキーマで左右が対称になっている表現だけが、倒置表現が可能になる。(ia)は(34a)、(ib)は(36a)、(ic)は(36b)、(id)は(36c)の倒置表現で、適格なのはスキーマ上で左右対称になっているものに限られる。

(i)　a．*今の長野県は信濃です。　b．今の長野県は、昔の信濃です。
　　c．*長野県は、昔の信濃です。d．長野県は、信濃です。

＊8　時間毎ではなく、状態毎の成員からなるカテゴリーもありうる。

(i)　a．着物を着たときの洋子　b．仕事に没頭しているときのあいつ　（西山 2003: 31）

引用文献

Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudoclefts*. Dordrecht: Foris.

Higgins, F. R. (1979). *The Pseudo-Cleft Construction in English*. Routledge. New York: Garland.

今井邦彦，西山佑司（2012）『ことばの意味とはなんだろう：意味論と語用論の役割』東京：岩波書店.

上林洋二（1988）「措定文と指定文：ハとガの一面」『筑波大学文藝言語研究・言語篇』14，57-74.

北野浩章（2018）「「今の」＋固有名詞・「昔の」＋固有名詞」『愛知教育大学研究報告．人文・社会科学編』67(1)，57-64.

熊本千明（1995）「同定文の諸特徴」『研究紀要』27，147-164.

――――（2016）「同定の概念について」『佐賀大学全学教育機構紀要』4，1-17.

西山佑司（1990）「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』，133-148.

――――（1993）「コピュラの用法とメンタルスペース理論」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』25，49-82.

――――（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』東京：ひつじ書房.

西山佑司編（2013）『名詞句の世界』東京：ひつじ書房.

（おがた　たかふみ：英語学科教授）